

手紙の宛先
マルケラ

ポルピュリオス



ピタゴラス伝/マルケラへの手紙/


ガウロス宛書簡

山田 道夫 訳



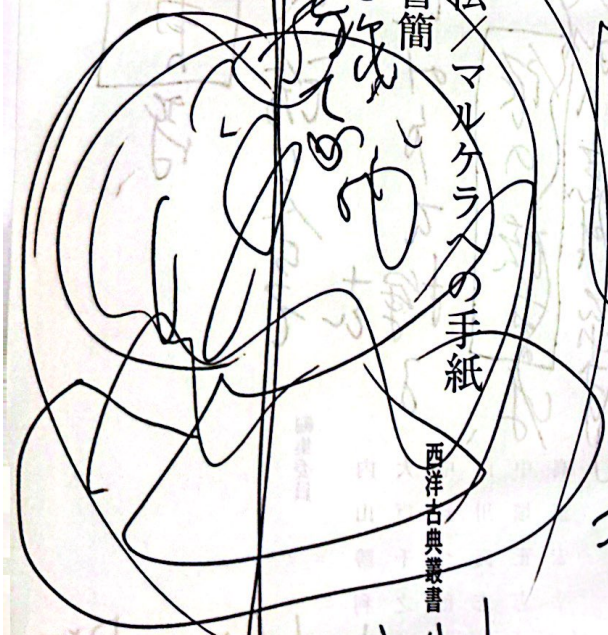
a
 d r e
 H
 6
 x z e z (R) z
 d z h t e s t p m

420CA
 1/2 3' 47

3/20
 10-21-10-2
 (K) 100
 100) h
 100-100


10万本以上
10万本以上
10万本以上

10万本以上
10万本以上
10万本以上



ホルビュリオス
ピタゴラス伝
ガウロス宛書簡

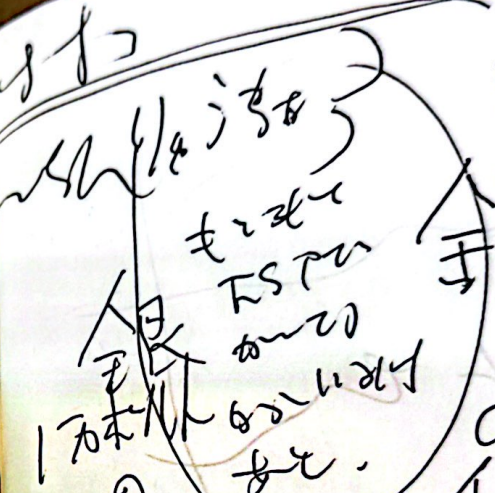
マルケラへの手紙

西洋古典叢書

150本以上
150本以上
150本以上

200本以上
200本以上
200本以上

NHK
NHK
NHK



10万本以上
10万本以上
10万本以上

10万本以上
10万本以上
10万本以上

10万本以上
10万本以上
10万本以上

10万本以上
10万本以上
10万本以上

① Obwar, ...
改訂

② Obwar ...
ピタゴラス伝

③ Obwar ...
1. Logic (4th ed)

2. 密教 (場)

3. ...

12月5日
↑ ...
↑ ...

Obwar
...

Obwar ...
...

突散へふ本出(均)と

ピタゴラス伝 (マルコスもしくはバシレウスによる)

「ピタゴラスが」ムネサルコスの子として生まれたことは大多数において一致しているが、ムネサルコスの出自については意見が分かれている。すなわち彼はサモス人であると主張する人々がいる一方で、ネアテスは「伝説集」第五巻においてシリアのテュロス出身のシリア人だと言っている。そしてサモス島の人々が穀物不足に陥っていたとき、ムネサルコスが商用で船に穀物を積んで島にやってきて、「穀物を」代価として支払うことで「サモスの」市民権を贈与されたという。またピタゴラスが幼時からあらゆる学びにすぐれた資質を示したので、ムネサルコスは彼をテュロスへ連れて行き、その地でカルダイア人に引き合わせ、彼らからさらなる薫陶を受けさせた。だがピタゴラスはそこからイオニアに戻って、はじめはシユロスのペレキュデスに、次いでサモスですでに老いつつあった、クレオピュロスの子孫ヘルモタマスに師事したとのことである。二 だがネアテスが言うには、また別に、ピタゴラスの父はレムノス島に植民したテュレニア人たちの一人であり、そこから商用でサモスに来て在留し、市民になったと主張する人々もいる。またムネサルコスがイタリアへ航行するのにピタゴラスが随行したとき、彼「ピタゴラス」は非常に若く、イタリ



Handwritten notes and scribbles at the bottom right of the page, including some illegible characters and lines.

アはきわめて繁栄していたので、後年、彼は「サモスから」イタリアへ出航したのだと言っていることである。

クラantz編「ソクラテス以前哲学者断片集」(以下「断片集」)一六二(一)「ア」

(一)写本には「クレオピュテス (Kleopytes)」とあるが、底本はアレクサンドリアのレメニス (ストロマトイス (雑纂) 一六二(一)「ア」) やリプトクセノス (断片 一一 a-b (雑纂)) によって「ネアテス」に改訂している。オクス

フォード古典辞典 (OCD) ではキュジコピュアテス (2) は前二世紀とされているが、テ・プラト (水地 (2)) は前二世紀としている。また (OCD) はネアテスの著作として「キシア史」、キユジコピュアの年代記「神話集」(歴史編)、「著名人ちについて」を挙げてゐるが、「神話集」という書名を残すはキユジコピュア代々の神話集」に属することを考へてのことであろうか。テ・ラセは「ソクラテス」の部分を「断片集」(一六二)「断片」二九が「伝説集」(五)の部分を「ピタゴラス派」(一六二)と読んでいる。二に含めるのではないかと考へられる。

「前六世紀の人」神話集「宇宙生成論を散文」(二)「ア」(以下「断片集」)「断片」二九が「伝説集」(五)の部分を「ピタゴラス派」(一六二)と読んでいる。二に含めるのではないかと考へられる。

「前六世紀の人」神話集「宇宙生成論を散文」(二)「ア」(以下「断片集」)「断片」二九が「伝説集」(五)の部分を「ピタゴラス派」(一六二)と読んでいる。二に含めるのではないかと考へられる。

「前六世紀の人」神話集「宇宙生成論を散文」(二)「ア」(以下「断片集」)「断片」二九が「伝説集」(五)の部分を「ピタゴラス派」(一六二)と読んでいる。二に含めるのではないかと考へられる。

「前六世紀の人」神話集「宇宙生成論を散文」(二)「ア」(以下「断片集」)「断片」二九が「伝説集」(五)の部分を「ピタゴラス派」(一六二)と読んでいる。二に含めるのではないかと考へられる。

佐藤 最新断片集

Handwritten notes and scribbles on the left side of the page, including some illegible characters and lines.

「断片集」(一六二)「断片」二九が「伝説集」(五)の部分を「ピタゴラス派」(一六二)と読んでいる。二に含めるのではないかと考へられる。

「断片集」(一六二)「断片」二九が「伝説集」(五)の部分を「ピタゴラス派」(一六二)と読んでいる。二に含めるのではないかと考へられる。

また彼にはエウノストスとテュレノスという年長の二人の兄がいたとも「ネアンテス」語っている。またアポロニオスは「ピタゴラスについて」のなかでサモスの創建者アンカイオスの子孫であったピユタイスという母親のことも記している。そしてアポロニオスは、彼のことを生まれはアポロンとピユタイスの子であるが、名義上ムネサルコスの子とされているのだと説明する者たちもいると言う。じつさいサモスの詩人たちのなかにはつぎのように言う者がいるとのことである。

そしてピタゴラスも、セウスに愛でられた彼をアポロンによって産みしはピユタイス。サモス人のうちで最大の美を授けられし女。

またこの人「アポロニオス」は「ピタゴラスが」ペレキュデスとヘルモタマスだけでなく、アナクシマンノロスの講筈にも列したと言っている。三 またサモスの人ドゥリスは「年代記」の第二巻で彼の息子としてアリムネストスという名も記し、この人はデモクリトスの師であったと言っている。アリムネストスは道徳から戻ったとき、ヘラ神殿に差し渡しニペーキユス近くもある青銅の捧げものを奉納したが、そこにはつぎのような詩句（エビグラム）が刻まれていたという。

ピタゴラスの愛しき息子アリムネストスが我を奉納し給う
 数比のうちにあまたの知恵を見出し給いて。

だがこの銘文を音楽学者のシモスが削り潰し、カノン（比率、音階比）をも奪い取って自分のものとして公表した。さて刻銘された知恵は七つあったが、シモスが一つを掠め取ったために、奉納品に刻まれていた

この詩句の
 たいへん
 たいへん

自我の没入

（一）ピタゴラス派の賢者デュアナのアポロニオス（後一世紀頃のことであると思われる。「イアンプリコス」二五四―二四四もアポロニオスの名を明記しており、同じ「ピタゴラスについて」に依拠している。
 （二）エレゲイア詩の二行は「イアンプリコス」五にも引用されている。ただし「イアンプリコス」では「セウスに愛でられた」はアポロンに掛かっている。なおまた「イアンプリコス」はピタゴラスの出自についてはサモスの創建者の子孫であったという説のみを採用し、母親だけでなく父親もアンカイオスの子孫であったとしている。

（三）サモスのドゥリスの生存年代は前三四〇―二六〇年頃と推定されている。サモスの僧主であり、テオプラストスの弟子であったとも言われる。

（四）アリムネストスという息子の名は「ディオゲネス・ラエルティオス」にも「イアンプリコス」にも記載されておらず、アリムネストスの知恵の奉納とシモスによる剽窃の話は内容がよくわからない。エビグラム二行目の「数比のうち

他の知恵も一緒に消し潰されたとのことである。

に」と訳した *enkyklios* は「言葉において」と読むのが簡便であり、ア・ブラセや水地(1)は単に「言葉によってあまたの知恵を明示した、書き表わした」といった訳出をしているが、*enkyklios*（見出して）という語とうまく繋がらない。シモスが剽窃したという「カノン」の語の原義は「棒、竿」であり、物差し、天秤の竿、織機の杆や篋、一弦琴の弦などを指して用いられ、転じて尺度、基準、さらには音階の意味をもつ。シモスは音楽学者とされているので、何か音階構成上の尺度と解し、「カノン」は現在では楽曲の形式として馴染みのある語でもあるので、「カノン（音階の構成比）」と訳しておく。アリムネストスの知恵をピタゴラス派による数学の比例中項の発見と結び付け、シモスを「イアンプリコス」末尾のピタゴラス派人名録中のポセイドニアのシモスと同一視する解釈もあるが、これについては水地(1)の訳注3(3)を参照のこと。

7 | ピタゴラス伝

この詩句の
 たいへん
 たいへん

この本は... (Handwritten note at the top right)

ケス、娘をミエイアと記しており、また「娘として」アリゲノテの名をも挙げる人々がいる。そしてこの息子を娘たちにまよるピタゴラスについての書物が残されているとのことである。ティマイオスが語るには、ピタゴラスの娘はクロトンにおいて、処女の頃には処女たちを、妻女となってからは妻女たちを先導していたが、その住居をクロトン人たちはテメテルの神殿に仕立て、「そこに至る」道をもうさたちの聖所と呼んでいたという。五 だがリュコス⁵は「歴史」第四巻において、彼の生国についても幾人かのあいだで意見が分かれていて、言及して「その生国と、そしてこの人がその市民となるに至った都市をたまたまご存知なくとも、まったく気になさるな。彼のことをある者たちはサモス人だと言い、ある者たちはプリウス人、またある者たちはメタポンティオン人だと言う有様なのだから」と言っている。
六 なおまた彼の教師としての学識についても、大多数が言うには、数学的と呼ばれる知識に属するものはエジプト人とカルタイア人とフェニキア人から学んだ。すなわち幾何学は大昔からエジプト人が、教と計算に関するものはフェニキア人が、また天についての観察はカルタイア人が取り組んだものだからであり、神々への祭儀やその他の生活上の営みについてはマゴス僧たちから聴講して学び取ったと彼らは言っている。
七 そして以上のことは「覚書」³に書かれているので多くの者がほぼ承知していると言ってよいが、その他の営みや行動についてはそれほど知られていないというのである。ただし、エウドクソスは「地誌」第七巻で、「ピタゴラスが」清浄さを求め、殺害や殺害者を忌避したことは非常なものであつて、それゆえ動物「の肉を食すること」を避けたばかりでなく、屠殺業者や猟師にもけつして近づかなかつたと言っている。またアンティポンは「徳」において第一等の人々の生涯についてにおいてエジプトでの彼の忍耐強さのことも

例として... (Handwritten note at the bottom right)

ピタゴラスの... (Handwritten note at the top left)

行々... (Large handwritten characters in the middle)

- (1) シケリアのタウロメニオンの人。前三五六―二二六〇年頃。長くアテナイに滞在してペリパトス派と交流した。
- (2) 「ディオケネス・ラエルティオス」八・一五や「イアンプリコス」一七〇にも同様の記事があるが、「クロトン」ではなく、「メタポンティオン」であり、キケロもメタポンティオンのピタゴラスの旧居を訪れたと言っている(善と悪の究極について)五・二・四)ので、典拠のティマイオスではメタポンティオンであつたと思われる。だがホルビュリオスは、ピタゴラスはクロトンでの騒乱を逃れてメタポンティオンに到達したあと、ここでも暴動に遭つてまもなく死んだ(餓死、自殺)という伝承を採用している(五六、五七)ので、単なる書き間違いではないだろう。
- (3) 写本には「リュコス」とあるのを、底本は「リュコス」に改訂している。リュコスはレギオンの人で、前三〇〇頃盛年。「リュコン」(Dx五七)への改定案もあり、これはピタゴラス派のタラスのリュコン(「イアンプリコス」二六七、「ディオケネス・ラエルティオス」五・六九)か、あるいは「ピタゴラスの生涯」を書いたとされるイアソスのリュコン(Dx五七、三)であろう。
- (4) マゴイ(マゴスの複数形)はメディア民族の一部族で、メディア王国とこの王権を打倒したアケメネス朝ペルシアにお
- いて宗教祭祀を司る神官階級を形成した。ヘロドトス「歴史」一・一〇一、一〇七―一〇八、七・一三三、一九一、「ディオケネス・ラエルティオス」一・六一九、ホルビュリオス「肉食の忌避について」四・一六など参照。
- (5) この「覚書」が何を指すのかは判然としない。デ・プラセは博識家(ポリユイストール)アレクサンドロスが「哲学者たちの系譜」において言及した「ピタゴラス派に関する覚書」(ディオケネス・ラエルティオス)八・二四―三三)だとしているが、六節の内容と重なる行文はここには見当たらない。「イアンプリコス」一五七の「ピタゴラス派によって書かれた覚書」に基づく記述のうち一五八後半の行文は重なるところが多いように思われる。
- (6) クニドスの人。前四〇〇―三三〇年頃。数学、天文学等において顕著な業績を残した。アテナイに二度滞在して、プラトンのアカデメイアとも交流したと言われる。エウドクソスの「地誌(世界周遊記)」は「ディオケネス・ラエルティオス」にも言及されている(一・八、八・九〇)。
- (7) 「ディオケネス・ラエルティオス」八・三においても同名の人の同じタイトルの書に基づく記述が見られるが、人物も年代も不明。